

1 研究の内容

(1) はじめに

私たちは日常の中で音楽を「聴くもの」「鑑賞するもの」として捉えることが多い。音楽室では静かに座り、教師の説明や音源に耳を傾ける姿が基本となる場面も少なくない。しかし、子どもたちの姿に目を向けると、音楽が流れた瞬間に自然と体が揺れたり、リズムに合わせて手を動かしたりする様子が見られる。このような姿は、音楽が本来、身体全体で関わる活動であることを示している。

本研究では、「やる音楽」という視点から、音楽を実際に行為として体験することの意味を考える。その際、音楽を行為として捉える「ミュージッキング」の考え方と、子どもが「からだまるごと」で音楽を楽しむ姿を中心に考えていく。

(2) 「やる音楽」とは何か

「やる音楽」とは、楽器演奏に限らず〈歌うこと〉〈手拍子をする〉〈身体を動かすこと〉〈声や音で反応すること〉など、音楽に主体的に関わる行為全体を指す言葉であると捉える。ここでは、上手に演奏できるかどうかや、正確さよりも、「音楽に関わっている状態」そのものが重視される。

例えば、簡単なリズムに合わせて手拍子をする子ども、歌詞を覚えていなくても口ずさむ子ども、音楽を聴きながら自然に体を揺らす子どもも、「やる音楽」に参加していると言える。これらの姿は、音楽が一部の専門的な人だけのものではなく、誰もが参加できる活動であることを示している。

(3) ミュージッキングの考え方

ミュージッキング (Musicking) は、音楽学者クリストファー・スモールによって提唱された概念である。この考え方では、音楽を完成された「作品」としてではなく、「行為」や「営み」として捉える。演奏する人だけでなく、聴く人、歌に合わせて動く人、その場を準備する人までもが音楽を「している」存在であると考えられる。つまり、音楽とは人と人との関係性の中で生まれる活動なのである。

学校現場においても、教師が演奏し、子どもが聴くだけの一方的な音楽活動ではなく、子ども自身が音楽の一部となる活動が重視されるべきであると考えている。「やる音楽」は、このミュージッキングの考え方を具体的に体現するものである。

(4) からだまるごとで音楽を楽しむ子どもの姿

子どもは音楽を耳だけで聴いているのではない。リズムに合わせて体を動かし、声を出し、表情を変えながら、身体全体で音楽を感じ取っている。特に低学年の子どもにおいては、身体表現と音楽体験が強く結びついている。

例えば、一定のリズムが流れると、自然と足踏みを始める子どもがいる。速いテンポの音楽では動きが大きくなり、ゆったりした音楽では動きが小さくなる。このような姿は、音楽の特徴を身体で理解している証拠であると言えよう。

また、打楽器や身近な物を使って音を出す活動では、子どもは音の大きさや響きを体感しながら、自分なりの表現を試みる。ここでは正解は一つではなく、子ども一人ひとりの感じ方が尊重されるべきであると考ええる。

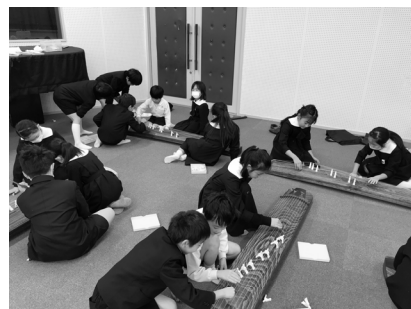
(5) 「やる音楽」が引き出す学び

「やる音楽」は、子どもの多様な学びを引き出す力をもっている。第一に、音楽への親しみが深まる点である。受動的に聴くだけでなく、自ら関わることで、音楽は身近な存在となる。第二に、自己表現の場となる点である。言葉では表しにくい気持ちも、音や動きによって表現することができる。恥ずかしさを感じながらも、少しずつ音楽に参加していく子どもの姿は、自己肯定感の育成ともつながっているのではないかと。第三に、他者との関係性が育まれる点である。リズムをそろえたり、音を掛け合ったりする活動を通して、子ども同士の一体感が生まれる。これは、ミュージッキングが示す「人と人をつなぐ音楽」の姿そのものであると捉える。

2 カリキュラムの特徴（本校のカリキュラムは、帯単元で展開している）

1・2年生では、からだを使って、音楽することに重点をおいている。特に1年生の入学当初は、幼児教育からのなめらかな接続を目指すべく活動に重点を置いている。その一つが、わらべうたあそびである。子どもたちは、初めて出会う仲間と、手を取り合い、ともに歌い、活動を成立させようとするのである。たった数分でも、子どもたちの中には、様々なことが起き、それを子どもたち同士で解決しようとしていく。「あそび」という活動の中に、音楽の授業を位置づけ、音楽的要素も取り入れている。また、歌集「歌はともだち」（教育芸術社）の中から自分で選んだ曲をクラス全体で歌う活動も常時活動に位置づけている。

2・3年生では、和楽器に触れる機会も設け、多様なモノに出会う機会を多く設定している。2年生では、江戸囃子を唱歌から体験し、締太鼓、桶胴太鼓、篠笛とアンサンブルを楽しむ。3年生になると大太鼓や箏との出会いもある。また、ソプラノリコーダーとの出会いもある。自分息がそのまま音となって表れる楽器の一つであり、自分の身体から出てくる息を感じられるよう配慮している。あそびの延長線上に位置するよう、楽曲選択にも配慮している。



4年生から6年生では、自分たちで音楽活動を計画し、実行していく「Music Map」の時間がある。

「Music Map」は年間を通して継続・活動していくものである。この学習の大きな特徴は、活動を自らが設計し、進めていくところにある。従って、扱う楽曲や表現方法も個に委ねられている。また、活動するメンバーも一人から数人のグループと多岐に渡り、集団構成も流動的である。この活動では、子どもが自分で音楽活動を運営していく。様々な音楽が混在する教室空間で、インスピレーションを得て、アイデアを思い描き、行動計画を設計し、進歩について振り返り、自己もしくは他者からのアドバイスを受けとめ、ひとつのタームを完了させていく。調査し、探求し、作品（演奏）を創造し、見直し、修正を繰り返したのちに、完了のタイミングとその成功度のある程度判断する。また、子どもたちは、自分なりの探求の道筋に沿って、学んだことを自分のものにしていく。作品（演奏）に深くかわり、創造性の拡散的な思考過程と収束的な思考過程を示し、問題に対する解決方法を自立的に発明する。

このような学習の繰り返しから、音楽的要素の習得や表現の自由さを認識し、次なる活動へとつなげている姿が多く見られている。個では味わえない、集団で活動している学校音楽だからこそその醍醐味でもある。常に音がある環境で仲間とともに活動することから、自己や作品（演奏）をメタ的に捉える力を自然と身に付けていくと捉えている。同時に、音楽を通して、音楽における認知的スキルと、社会情動的スキルを交錯させながら複合的に習得していくと考えている。

以上の活動に加え、一斉活動として器楽演奏（リコーダーを中心とした）や歌唱活動も行う。仲間と息をあわせるおもしろさや心地よさを感じる機会になるだけでなく、音の重なりに気づく機会になることも多い。自分で音楽と向き合う時間、集団で一つの音楽を奏でる時間を、音楽フィールドに共生させていることが、自ら音楽に関わること、まさに「やる音楽」につながっていると捉えている。

また、11月に行われる全校音楽会に向けた取り組みにおいて、学年で一つの音楽をつくりあげていく過程においても、音楽に限らない実に大きな学びあいの時間がある。一人ではできない、集団だからこそ経験できる大きな音楽活動の一つと言えるのではないかな。

3 授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

（1）実践事例

① リズムであそび活動（低学年）

低学年の授業では、一定の拍を感じる活動が「やる音楽」の入り口となる。教師が太鼓や手拍子で四分音符の拍を示すと、子どもたちは自然に手をたたいたり、膝を打ったりしながら参加し始める。ここで重要なのは、教師もともに楽しみ、動き方や音の出し方を細かく指示しすぎないことであると考え

ている。ある授業では、教師が「どんな音が合いそうかな？」と問いかけると、子どもたちは足踏みや手を軽くたたくなど、思い思いの方法でリズムを表現し始めた。音楽が止まると同時に動きも止まり、再び音が始めると一斉に身体が動き出す姿が見られた。この活動では、子どもは楽譜を読まずとも、身体感覚を通して拍やテンポを理解していく。また、わらべうたあそびを通して以上のような音楽的要素や関係性が育まれていく。



② 身体表現と音楽（中学年）

中学年では、音楽の特徴を身体の動きで表す活動が有効であると言われている。例えば、同じ旋律でもテンポや強弱の異なる音楽を聴かせ、「音楽に合う動きを考えよう」と促すと、子どもたちは、速い音楽では大きく跳ねたり走るような動きをし、ゆったりした音楽では腕を大きく回したり、ゆっくり歩いたりする姿が多い。このときに、例えば、教師が「今の動き、音楽のどんなところを感じたの？」と問い返すことで、子どもは自分の身体表現を言葉と結びつけていくのである。音楽の構造を分析する前段階として、身体で感じ取る経験が積み重なっていくと考えている。

③ 打楽器を使った音づくり（中学年）

身近な打楽器や教室にある物を使った音づくりの活動も、「やる音楽」を実感しやすい実践であるのではない。タンバリン、カスタネット、木片、さらには鉛筆や机など、さまざまな音源を用いる。グループごとに簡単なリズムを考え、順番に音を重ねていく活動では、子ども同士が互いの音をよく聴きながら関わる姿が見られる。ここでは、音の大きさや入るタイミングを自然に調整する姿が生まれ、ミュージッキングが示す「関係性としての音楽」が具体化されると捉えている。

④ 歌唱とからだの動きを結びつける活動（全学年）

歌唱活動においても、「やる音楽」の視点を取り入れることができる。歌いながら手拍子を入れたり、フレーズのまとまりに合わせて身体を動かしたりすることで、旋律の流れを身体で捉えることができる。あるクラスでは、歌の盛り上がる部分で自然と声が大きくなり、身体の動きも広がっていった。教師が「今、体はどうなっていた？」と問いかけると、子どもは「音が高くなったから」「強くなったから」と、音楽的な要素に気づいていく姿も多く見られた。

⑤ Music Map の時間（４・５・６年）

Music Map の時間では、多くの子どもが器楽の活動に取り組んでいる。楽曲選択やメンバー、使用楽器の選択も個々に委ねられている中で、子どもたちは自分（たち）の表現したいように毎時間形を変えながら進んでいる。時に立ち止まり考えたり、考えを伝えたりする中で、新たな音楽観と出会うことができる。そして、常に新たな音楽へと生まれ変わっていくことが多い。正解がないからこそ、「やる音楽」の幅が広がる。子どもは他者の音に反応しながら、自分の音を選択する。この過程そのものがミュージッキングであり、音楽を「共につくる」経験となる。

（２）実践を通してのまとめ

① 教師の役割と環境づくり

「やる音楽」を実現するためには、教師の関わり方と学習環境の整備が重要である。教師が演奏の正確さや技能の優劣を強調しすぎると、子どもは失敗を恐れ、音楽活動への参加をためらうようになる。

一方で、どのような音や動きであっても「音楽に関わっていること」自体を肯定的に受け止めることで、子どもは安心して表現することができる。教師は一方的に教える存在ではなく、子どもと共に音楽をつくり、場を支える存在として位置づけられると考える。また、教室の空間づくりも重要である。机や楽器の配置を工夫し、自由に動けるスペースを確保することで、子どもは身体を使った音楽活動に参加しやすくなる。こうした環境づくりは、ミュージッキングの視点から見ても、音楽を共有する場を成立させるための基盤となる。



②考察（ミュージッキング理論との対応）

本実践をミュージッキング理論の観点から捉え直すと、「やる音楽」はクリストファー・スモールが示した音楽観を、学校教育の場で具体化した実践であると位置づけられる。スモールは、音楽を固定された作品としてではなく、「人々が音楽的に関わる行為＝musicking」として定義した。この定義に立てば、音楽の本質は演奏の完成度ではなく、音楽行為を通して形成される人間関係や意味生成の過程にある。本実践において、子どもが手拍子や身体の動き、仲間とともに活動する MusicMap の時間を通して音楽に関わる姿は、まさに「音楽をしている（musicking）」状態であると捉えている。ここでは、楽譜を正確に再現することよりも、「その場に参加し、音楽的関係性を結ぶこと」が重視されている点で、スモールの理論と明確に対応している。また、スモールは、音楽行為を通して人々が「どのような関係を理想として描いているのか」が表出すると述べている。グループで音を重ねたり、相手の音を聴いて反応したりする活動では、子ども同士が互いを尊重しながら関係を調整する姿が見られた。これは、音楽活動が単なる技能習得ではなく、社会的関係性を学ぶ場となっていることを示していると言えよう。さらに、ミュージッキング理論では、聴衆や周囲の環境も含めて音楽行為が成立すると考えられる。本実践では、音を出していない子どもであっても、周囲の音を聴き、身体を揺らし、場に存在していること自体が音楽への参加として捉えられている。この点は、「参加の多様性」を認めるミュージッキングの視点と一致している。加えて、子どもがからだまるごとで音楽に関わる姿は、音楽を知的理解の対象としてではなく、身体的・感覚的経験として捉える立場を補強するものである。スモールの理論が示すように、音楽は行為であり、経験であるという考え方は、身体活動を基盤とした「やる音楽」の実践によって、教育現場で具体的に可視化されたと言える。

以上のことから、本実践は、ミュージッキング理論を背景に、音楽科における学びを「作品中心」から「行為中心」へと転換する試みであり、子ども一人ひとりを音楽の担い手として位置づける教育的意義をもつと考えられる。

4 今後に向けて

（１）成果

第一に、子どもが音楽活動に主体的に参加する姿が多く見られるようになった点が成果として挙げられる。音楽が始まると自然に身体が動き、音や動きで反応する姿は、「やる音楽」が子どもにとって自然な学びの形であることを示している。第二に、音楽的要素への気づきが深まった点である。身体表現や様々な音楽活動を通して、子どもはテンポや強弱、音の重なりといった要素を体験的に理解していた。第三に、子ども同士の相互理解が育まれた点も成果と言える。音を合わせる活動やグループでの表現を通して、子ども同士が互いを意識し、関係性を築く姿が見られた。

（２）課題

一方で、課題も明らかになった。第一に、活動が自由度の高いものになるほど、音楽的なねらいが曖昧になりやすい点である。そのため、教師は活動の目的を明確にし、振り返りの時間も十分に確保する必要がある。第二に、身体表現に抵抗感を示す子どもへの配慮である。無理に動きを強要するのではなく、見る・聴くといった関わり方も含めて「参加」と認める視点が求められる。第三に、評価の在り方である。「やる音楽」では成果が数値化しにくいいため、子どもの変化や関わりの過程を丁寧に見取る評価方法を工夫する必要がある。

（３）おわりに

「やる音楽」は、音楽を特別な技能としてではなく、誰もが関われる行為として捉え直す視点である。ミュージッキングの考え方を取り入れ、子どもがからだまるごとで音楽を楽しむ学びを積み重ねることは、音楽科の学びをより豊かなものにすると信じている。今後も実践を重ねながら、「やる音楽」が子どもの成長にどのように寄与するのかを継続的に検討していきたい。

（下田・町田）

参考文献：クリストファー・スモール、野澤豊一＋西島千尋訳（2011）『ミュージッキング』水声社